

里の宝再発見と地域づくり

～地元から学ぶ、暮らしと文化を伝承する、村ぐるみ活動のすすめ～

2010年9月28日

NPO法人里の自然文化共育研究所

専務理事 出川真也

1. 東北山村の現状 - 課題から地域の価値・誇りの復権へ -

(1) 山村の過疎少子化と誇りの喪失「何もないムラ」という語り

- ・日々可視化される課題の山積み状況
- ・現状では生業として成り立たない山村独自の仕事や資源の数々
- ・「よく何もないムラに来たなあ」という語り

(2) 多様な地域活動の存在と地域づくりの萌芽

- ・地域共同組織を支える意識と多様な地域教育活動の存在
- ・集落を基本単位とする互助協働の伝統的営みの存在

2. 地元学とは - ヨソモンの目線の違いを生かして地元の再発見を -

(1) 自分たちで自分たちのことを調べる、地元学ぶ「地元学」

- ・自分たちで調べるということ - 調べた人が一番詳しくなる -
- ・単なる調査ではない住民のための調査 - 役立てるために調べるということ -

(2) ヨソモンの目線の違いを生かして自分たちのことを再発見するプロセスの重視

- ・住民にとっては日常的で当たり前。ヨソモンにとってはその当たり前がすごい。
- ・外部者の目線を活用して、外部者ではなく住民が自分たちのことを再発見する。

(3) 従来型の（行政・研究者・コンサルタント等による）調査・研究・計画づくりとの相違

- ・調査後の活動の展開を担う住民やかかわる当事者による調査ということ

(4) 当事者による地域計画づくり・組織と実行プログラム作り

- ・自分たちで調べたことを元に企画
- ・住民による現実的かつ自由な発想の計画作り
- ・地域の実情に合わせた組織・プログラムの作りの遂行

3. 地元学後の展開 - 住民の草の根活動の組織的展開 -

(1) 戸沢村角川地区の事例から - 里の自然環境学校の設立と活動の展開 -

- ・地域運営学校としての組織 - 地元住民が里の先生として取り組む -
- ・地元のありのままの営みを活動プログラムとして再生
- ・地域環境保全や地域に寄り添った新機軸活動の導入
- ・交流と学習の促進

(2) 地元学は調査から実際の活動まで地域住民とヨソモンが織りなしながら作り上げる

- ・取り組みに直接かかわる当事者が計画から実行、展開まで主体となるべきもの
- ・地域内コミュニケーションの活性化と地域の潜在能力の発揮を促す

4. 地域活動の発展と継続性 - コミュニティビジネスと集落を越えたネットワーク形成 -

(1) 自律的な活動展開を目指したコミュニティビジネス構想

- ・戸沢村角川地区の事例 - 山村地域から森里川海連携の広域協働活動の展開へ -
- ・産品開発とツーリズムの活性化

(2) 広域的なネットワークの構築

- ・活動を支える外部サポーターの充実
- ・連携して事業展開を図るための近隣地域集落・市町村およびNPO団体等との相補的な関係の構築 - 継続性と有効性を保持する規模の確保 -

(3) ベースとなる地域づくりコンセプトの保持が重要

- ・地域の若者たち（担い手）が暮らし続けていけるための仕事を作り出そうという発想
- ・伝統文化を継承しつつ地域の様々な基礎力（保全・生業・コミュニティ）を保持向上させようという基本的考え

(4) NPO法人里の自然文化共育研究所の設立

- ・広域的・普遍的な活動意義の発信とネットワーク形成 - 交流と学習の活性化 -

5. 最新の状況 - 次世代に繋ぐ地域コミュニティの新たな再創造に向けてNPOの役割 -

(1) 活動思想と基盤がしっかりしたコンパクトで機動性あるネットワーク型NPOの育成

- ・地域内の協働連携の仕組み作り、地域外との協働連携の仕組み作り
- ・各地域の活動目的に寄り添った多様なネットワーク運用のコーディネート機能

(2) これからのコミュニティのあり方 - NPOとコミュニティの相乗的活性化 -

- ・伝統的住民だけではない、コミュニティにかかわる外部者も含みこんだ当事者重視のコミュニティという発想
- ・モノや豊かな暮らしを生み出すコミュニティとコーディネート機能を持つNPO育成